2014.01.16｜松永伸司

Frank Sibley, “Aesthetic Concepts.” *The Philosophical Review* 68 (1959).
底本は *Approach to Aesthetics* 所収の小改訂版（1962/2006）

¶1　The remark…
われわれが芸術作品に対してなす意見（remark）は、大きく二つのグループに区別できる。

① 標準的な目や耳や知性を持った人なら誰でもできる意見。たとえば、この小説には登場人物が大勢出てくる、この絵画には淡色が使われている、そのフーガの主題はここで転回する、その戯曲の話は、一日の中で起こる、等々。
② それをなすのに趣味（taste）、洞察力（perceptiveness）、感受性（sensitivity）――つまり美的識別ないし美的鑑賞〔の能力〕――の行使が必要とされる意見。たとえば、この詩はきっちりまとまっている（tightly-knit）、この絵画はバランスが悪い、その小説の人物は生き生きとしていない、等々。

ある語ないし表現を適用するために趣味や洞察力が必要とされるとき、そのような語ないし表現を「美的用語」（aesthetic term）あるいは「美的表現」（aesthetic expression）と呼ぼう。また、それに対応するものを「美的概念」（aesthetic concept）あるいは「趣味概念」（taste concept）と呼ぶ。

〔松永：「美的用語」と「美的概念」を一応区別しているように見えるが、この区別が議論に効いてくることはない。〕

¶2　Aesthetic terms…
美的用語はさらに下位の種類に分類できるかもしれないが、この論文の関心は、美的用語すべてが共通して持つものにある。

¶3　I have gone…
美的用語の事例として、芸術作品についての批評的・評価的な言説において使われるものを挙げたが、日常生活上の言説にも範囲を広げたい。批評的文脈の外部では美的用語として使われることの少ない用語もあるが、日常生活でも美的／非美的両方に使われるものや、主に美的にのみ使われる用語もある。

¶4　Clearly…

たしかに、ある語を美的用語として使う場合それはしばしば比喩であるし、多くの語はある種の比喩的転移によって美的用語になっている。しかし、美的語彙が全体として比喩的であると考えるべきではない。多くの用語は、その主要ないし唯一の用法が美的用法である。

¶5　The expression…
標準的な知性やよく見える目やよく聞こえる耳を持った人々が、美的用語を適用するために必要な感受性を欠いていることはよくある。そういうわけで、趣味や感受性は他の能力に比べていくらか希少かもしれない。とはいえ、ほとんどすべての人が、なんらかの物事についてある程度は趣味を行使できる。

¶6　The foregoing…
以上、この論文で扱いたい領域を特徴づけた。ひとつ注意すべきは、ここでいう「趣味」は、個人的な好みを指すのではなく、事物が特定の質〔美的質〕を持つということに気づいたり（notice）わかったり（see）それを伝えたり（tell）する能力を指すということである。

I

¶7　In order to…
われわれは、ある美的用語の適用を裏づける（support）ために、それとは別の美的用語が適用される特徴（feature）を持ち出すことがよくある。しかしまた、それを認識するのに趣味の行使に依存しないような特徴を持ち出してその適用を説明することもよくある。この後者の種類の説明を問うたり探したりするのは正当な（legitimate）ことである。場合によっては満足のいく答えを見つけるのが難しいこともあるが、その問いを拒むことはふつうできない。われわれがうまく説明できない場合でも、良い批評家が正しい（right）説明をすることもある。短く言えば、美的用語は、つねに、究極的には、いかなる趣味や感受性の行使もせずに識別できる諸特徴の現前（presence）のゆえに（because of）適用されるものであり、また、美的質は、つねに、究極的には、そのような諸特徴の現前に依存している。この依存がどんな種類のものであるにせよ、また美的質と非美的特徴の関係はさまざまであるにせよ、私がこの論文で明らかにしたいのは、あらゆる状況において美的用語の適用にとって論理的な十分条件として働くような非美的特徴はないということである。美的概念は、この点ではまったく条件支配的（condition-governed）ではない。

¶8　There is…
美的用語は、たとえば「正方形」のような必要十分条件にしたがって適用される語とは異なる。おのおのの正方形は同じ条件のゆえに正方形だが、美的用語の場合、あるものはかくかくの特徴のゆえに優美であり、別のものはしかじかの特徴のゆえに優美であり、といった具合に〔条件に〕

限りがない。最近では、多くの日常的な概念が、厳密な必要十分条件ではなく、もっとゆるい条件に支配されたものであることが示されている。私は、美的概念がこれら他の概念とは根本的に異なるものであることを示したい。

¶9　Amongst…

いかなる必要かつ十分な条件も与えられないが、いくつかの関連ある（relevant）特徴を持つ（つまり、その特徴のうちのいくつかの集まりが十分条件になる）ような概念がある。この関連ある特徴のリストは開かれたものであってもよい。たとえば「のろい」「失礼である」「知的である」等々。

¶10　However…

しかし、この種の概念については、個々の〔適用の〕ケースにおいて十分条件として見なされていた特徴の集まりを抜き出して述べることはつねに可能である。その関連ある諸特徴は、単独では十分条件ではないものの、それらのうちのどれかの集まりがその概念の適用の十分条件になる。

¶11　But aesthetic concepts…

しかし、美的概念は、以上のようなしかた〔ゆるい条件というしかた〕ですら条件支配的ではない。それらのうちのいくつかの集まりが、美的用語の適用を論理的に正当化（justify）ないし保証（warrant）するようないかなる非美的特徴もない。「もし彼があれやこれやそれができるならば、彼は知的である」とか「もし彼が A、B、C をするならば、彼はものぐさである」などと言うことはできるが、「もしその花瓶が淡いピンクでやや丸みを帯びており多少まだら模様でうんぬんかんぬんならば、それは繊細である」というかたちのいかなる一般的言明も〔美的概念については〕なしえない。

¶12　No doubt…

おそらく、いくつかの点では、美的用語は条件ないし規則によって支配される。たとえば、あるものの色がすべて淡いパステル調である場合にそれはけばけばしくなりえないかもしれないし、あるものの線がすべて直線である場合にはそれはごてごて（flamboyant）になりえないかもしれない。つまり、非美的用語のみを用いたある記述が、特定の美的用語を用いる記述と両立しえない場合がある。その種の〔非美的〕記述は、特定の美的用語を適用不可能（*in*applicable）あるいは不適切（*in*appropriate）なものにしうる。したがって、美的概念が否定的に（negatively）条件に支配される場合があることは否定できない。

〔松永：「Aesthetic and Nonaesthetic」（1965）ではこの論点はもう少し敷衍されている。そこでシブリーは、ある種の美的用語の適用には必要条件や前提（presupposition）がある場合があることを認めている。〕

¶13　I have said…

さらに、ある意味で一方向――特定の美的用語を適用する方向か、適用に反対する方向か――にのみ寄与する一般的な特徴ないし記述を見出すことができる。角ばっていること、太っていること、輝度が高いこと（brightness）、色が濃いことは、ふつうは、繊細さや優美さとは結びつかない。スリムさ、軽やかさ（lightness）、ゆるやかな曲線を持つこと、濃い色がないことは、繊細さに結びつくが、ごてごてしさ、壮麗さ、雄大さ、華々しさ、けばけばしさには結びつかない。これは、たとえば「角ばっている／どっしりしているにもかかわらず、とても軽やかであるがゆえに、彼女は優美である」などと言うことが自然であることを考えれば明らかである。それゆえ、この点は先に述べた「知的である」などの用語と似たようなものに思えるかもしれない。しかし、それでも非常に重要なちがいがある。繊細さに対して一方向にのみ寄与する〔非美的〕特徴があるにせよ、それらの特徴は、せいぜいのところ、繊細さに対して典型的に（*typically*）ないし特徴的に（*characteristically*）のみ寄与するにすぎない。それらは、〔先に述べた〕条件的特徴がものぐさや知的あることに寄与したのと同じ意味では、〔美的用語の適用に〕寄与しない。つまり、それらのどの集まりも論理的な十分条件ではないのである。

¶14　One way of…

この主張を補強するために、あるひとつの美的用語に特徴的に結びつけられる特徴が、いかに他のかなり異なる美的用語にも同じように結びつけられうるかを見る。「しまりのない」「弱々しい」「無気力な」「無味乾燥な」などといった質に特徴的な諸特徴――淡色、スリムさ、軽やかさ、角ばりと鋭い対照のなさ――は、「繊細な」や「優美な」に特徴的なものと実質的に同じである。同様に、「愉快な」や「力強い」などに特徴的な特徴の多くは、ふつう「けばけばしい」や「騒々しい」などの特徴と同じである。これらの特徴を持ちながらも、いかなる美的な特色も持たない場合もある（そういう場合ももちろん趣味は行使しているので美的判断である）。

¶15　There are…

もちろん、一方向にのみ寄与するのとはちがうしかたで特定の美的質に寄与する特徴もある。たとえば、韻律の規則性は、ある詩が力強いことの理由になる場合もあれば、別の詩が退屈で力強さに欠けることの理由になる場合もある。

¶16　It is important…

とはいえ、この論文で言いたいのは、たんに美的概念については十分条件が言えないということだけではない。もしそれで終わりだとすると、美的概念は H. L. A. ハートが「無効化可能」（defeasible）な概念と呼ぶものと同じということになる。無効化可能な概念は、特定の諸特徴が、特定の状況下で――つまり、それらの特徴に優先したりそれらを無効化したりする特徴がない場合に――十分条件となるような概念である。無効化可能な概念は依然として条件支配的だが、

美的概念についての私の主張は、より強いものである。美的概念は、否定的にそうであることを除けば、まったく（特定の状況下においてすら）条件に支配されない。

¶17　My arguments…

実際のところは、これまでに非美的なものとして挙げてきた諸概念（「知的である」など）も、条件を正確に特定することはできない。それらは規則ではなく事例を通して習得されるものであり、また、新しい事例に対して規則の手引きなしに適用されるものである。この点で、これらの概念は美的概念と表面的にはよく似ている。

¶18　But this is…

しかし、これは表面的な類似性にすぎない。「知的である」や「ものぐさである」といった語が適用される場合、判断力（*judgement*）を行使する必要があると言われる（趣味の行使が必要であるとはふつう言わない）。判断力を行使するときには、〔その概念の適用の〕是非を引き比べることが要求されるし、また場合によっては、まったく新しい特徴が〔適用か不適用かの〕いずれかの側に寄与すべきかどうかを決めることが要求される。この点で、それらの概念は、条件ではなく事例や先例によって習得されるものであったとしても、まだ一般的条件の領域内にある。このような非常にゆるいしかたで条件支配的な概念であっても、その概念の典型的な事例を取り上げることができるし、「これは x である。なぜなら…」と言って特徴を説明し、それが x であるかどうかに論理的にけりをつけることができる。

¶19　Nothing…

美的用語についてはこの手のことができない。事例が美的概念の習得に決定的な役割を果たしていることは疑いえないが、われわれは、それらの事例から美的用語を適用するための条件と原理（それがどれだけ複雑なものであれ）を引き出すことはしないし、できない。明らかに優美な事例があったとして、ある人が、それがなぜ優美であり、どの特徴がそれを優美にしているかを私に伝えるとしよう。その場合、私はそれが実際に優美であるかどうかをつねに疑える。いかなる特徴も、それが優美であるかどうかに論理的にけりをつけることができない。

¶20　The point…

美的概念の本性をわかってない人が、根気強い適用と抜け目のない観察によって美的概念を一般化し、帰納的手続きと知的な推測によってしばしば正しい適用をおこなうことがあるかもしれない。しかし、そのような人を信頼することはできないだろう。どんな場合でも、事物のちょっとした変化が彼の計算を台無しにするかもしれない。このような人は、美的概念を把握していることを示す端緒にすら立っていない。彼はしばしば正しいことを言うことかもしれないが、しかし、彼は、その事物が繊細であることを見ている（see）のではなく、推測している（guess）のである。

¶21　At this point…

美的用語があたかも規則にしたがって適用されうるように見えるケースを挙げておく。たとえば、ガラス細工について「繊細な」（delicate）を使う場合、それは（他の部分が同じならば）薄ければ薄いほどより繊細であると言われるかもしれない。同様に、織物や家具について、それが薄ければ薄いほど、あるいは仕上がりがなめらかであればあるほど、なんらかの美的用語がより適用されやすいかもしれない。これらのケースの中には、使われている語が実はまったく美的な用語ではないケースもあるだろう。たとえば、その場合の「繊細な」は、たんに「薄い」や「壊れやすい」を意味するにすぎないかもしれない。とはいえ、たしかに美的用語として使われているケースもある。このように規則があるように見える事例は、美的用語の使用の例外的ケースである。〔そしてやはり〕ある人がたんに規則にしたがって用語を適用しているだけなら、われわれは、その人が趣味を行使しているとは言わないだろうし、その人が繊細さという概念を実際に持っていると認めるのをためらうはずである。

¶22　It must not be…

美的用語の適用条件を述べることの不可能さは、言語上の貧しさや正確さの欠如の結果ではないし、極端な複雑さの問題でもない。表現力がいくら増したところで、条件を与えることは依然不可能だろう。

¶23　We do indeed…

実際のところ、芸術作品について語るとき、われわれはその個別的で特殊な特徴に関心を持つ。あるものが繊細であるのは、たんに淡色であるからではなく、まさにその淡色であるからだと言う。われわれが「その淡色のゆえに」「そのまだらの明るい青のゆえに」「その線のまとまりかたのゆえに」といった表現を使う場合、明らかにわれわれは一般的な特徴ではなく、まさにその特殊で特定の特徴を指している。しかし、そのような個別的特徴を指す正確な名前があったとしても、条件を述べようとすることは徒労に終わるだろう。まさにまったく同じ特徴が、一方の作品を成り立たせつつ、他方の作品を台無しにすることがありうる。おそらく、言い換えれば、あるものを繊細にしたり優美にしたりする特徴は、独特で固有のしかたで結びついているということである。つまり、美的質は、まさにこれこれの特殊な諸特徴のこの個別的ないし固有な結びつきに厳密に依存しており、それゆえちょっとした変化ですら全体的なちがいを作り出す場合があるということである。

¶24　I have now argued…

〔ここまでのまとめ〕条件支配的でないことは、美的概念の本質的な特色のひとつである。これを示すために、まず、一般的なしかたで、いかなる非美的特徴も条件の候補になりえないことを示し、次に、より特殊なレベルで、〔特定の〕美的用語に結びつけられる「特徴的な」一般的特

徴（"characteristic" *general* feature）と特定の対象に見られる個別的ないし特殊な特徴（individual or *specific* feature）の両方を考えた〔そしてどれも無理だった〕。

ある人物をものぐさであるとか知的であると言うのはなぜかと問われた場合、われわれは「彼はだいたい仕事を最後までやらないがゆえに（because of）」「彼はあれこれの問題を容易に処理するがゆえに」というふうに答える。しかし、ある絵画についてバランスを欠いているとか陰気な色調であると言うのはなぜかと問われた場合の答えは、異なる種類のものである。もちろん、言いかたとして「because of」を使うことはあるが、まったく別の表現を使って言うこともできる。たとえば、「その力強さと多様性に対して責任がある（*responsible for*）のは、その韻律と休止のやりくりである」「その質実剛健な質は、ディテールの欠如と制限された色数のおかげである（*due to*）」「そのバランスの欠如は、左手の人物たちのハイライトの結果である（*result from*）」「その短調の和音が、それをまったく感動的なものにしている（*make*）」「その集中している線が、それに統一感を与えている（*give*）」等々。これらの言い換えは、「ものぐさである」や「知的である」については言えない（別の意味になる）。

¶ 25　One after another…

最近、美的判断は「機械的」ではないと主張する論者が続々出てきている。それらの論者たちは、その「自発性と思索」を伴った「個別的な判断の代わり」になるものはないということ、そして「その最終的な基準は個々人の趣味の判断である」ということを強調している。しかし、誰も「趣味」や「機械的」といった言葉で何が意味されているのかを述べていないように見える。美的判断以外にも、「自発性」や「個別的な判断」を要求し「機械的」でないような判断は数多くある。細かく比較しないかぎり、美的判断がどんなしかたで「機械的」でないのか、あるいは美的判断は他の判断とどのように異なるのかを理解することはできない。私が試みてきたのはまさにこのことである。美的用語を用いる判断の本質的な特徴は、それが非美的条件に訴えることではなされえないという点にある。

II

¶ 26　A great deal…

論文の残りでは、美的概念の理解に向けてさらなる示唆を提示する。

¶ 27　The realization…

美的概念は否定的なしかた以外には条件に支配されないことが明らかになった。このことは、条件や規則がないにもかかわらずどうやって美的概念は適用されるのかという問題を生じさせる。自然な応答は、他の種類の概念もまた条件に支配されないことを指摘することである。その本が赤いのはそれを見ることによってわかるし、その紅茶が甘いことはそれを味わうことによってわ

かる。そこで、あるものが繊細であるとかバランスがよいというのも、たんに見てわかるのだと言えるかもしれない。このような趣味と五感の比較は、実際よくなされる。「taste（趣味＝味覚）」という言葉づかいそれ自体が、この比較がごく自然で古くからあるものであることを示している。しかし、似ているところがあるとはいえ、大きなちがいもまたある。

¶28　In the first place…
第一に、通常の知覚能力を持った人でも、美的特徴を識別できないことがある。

¶29　It is this difference…
「芸術作品は、感覚知覚の単純な対象ではなく、〔一部の人にしかわからない〕秘められた（esoteric）対象である」というマーガレット・マクドナルドの見解を導いているのは、まさにこの美的質と知覚的質のちがいである。しかし、たんにその対象のうちに美的質が見出されるからというだけで、それを秘められた対象とすべきではない。美的用語が適用される対象には、詩や音楽だけでなく、人や建物や花や庭や花瓶や家具も含まれている。また、美的質それ自体を秘められたものであるとする理由もない。結局のところ、われわれは、美的質に注意を払う（*observe*）とか気づく（*notice*）とか言うのであり、美的質は非常に親しみ深いものである。

¶30　The second…
趣味の行使と五感の使用のあいだにある顕著なちがいの第二は、われわれが美的な判断を裏づけるしかたにある。われわれは、美的概念を規則や条件ぬきに使用するが、それでもその判断を擁護したり裏づけたりするし、その判断の正しさを他の人に納得させようとする。そして、それは話すこと（talking）によってなされる。マクドナルドが言うように、「芸術についての議論は不毛ではない」。というのも、批評家は、「正しい判断を確立するという目的を持って芸術作品についての特定の種類の説明を試みる」からである。たとえ、この論争が「演繹的ないし帰納的な推論」でないとしても、美的判断についてそのような論争が生じるということは、美的判断と知覚的判断のちがいを示すのに十分である。

¶31　Now the critic's talk…
さて、批評家の話は、しばしば、美的質が依存する諸特徴（容易に識別可能な非美的特徴も含まれる）に言及したりそれを指摘したりするものである。しかし、いかにして、批評家が非美的な特徴に言及することによって自身の美的判断を正当化ないし裏づけをしているのか、という困った問題が残る。スチュアート・ハンプシャーが言うように、批評家の話は、自身がわかっている（see）もの（その対象の美的質）を、相手にもまたわからせる、という特別なしかたで自身の美的判断を裏づける。しかし、たとえ、これが批評家のする主なことだとしても、作品の非美的な特徴について話すことによって、相手がわかっていなかったものをわかるようにすることはどのようにして可能なのか、という困惑はやはり残る。

¶32　Yet of course…

とはいえ、もちろん〔事実としては〕われわれは美的用語の適用に成功するし、話すこと（そして指差しやジェスチャー）によって自分がわかっているものを他人にわからせることにもしばしば成功する。この困惑は、不適切な哲学的モデル〔この場合は知覚と美的判断を同じように考えるモデル〕を念頭に置いているから生じるのかもしれない。ある人がテーブル上の本が茶色であることが見ることができない場合、われわれは話すことによってその人にそれが茶色であることを見させることはできない。それゆえ、〔このモデルにしたがうと〕花瓶が優美であることを話すことによって他の人に見させることができるのが問題のように思えてしまうのである。この困惑を除くためには、不適当なモデルを捨てて、われわれは美的概念を実際にどのようにつかっているのかを探究しなければならない。批評家はどのようにしてそれをするのか。しかし、これについてはほとんど何も論じられてこなかったし、論じられているものも満足のいくものではない。

¶33　Miss Macdonald…

たとえば、マクドナルドは、この議論をしようとしながら、芸術作品の解釈という関連はするものの別の問題を扱っている。マクドナルドによれば、批評的言説において、批評家は、新しい解釈を提供することによって、自身がわかっているものを聞き手にわからせている。しかし、ここで問題になっている批評家の仕事は、われわれに美的質を鑑賞できるようにさせるということであり、その美的質は、他の批評家もふつう気づいているものである。なので、〔美的判断の裏づけという〕批評家の仕事を、新しい解釈の提示として特徴づけることはできない。

¶34　Hampshire…

ハンプシャーは以下のように論じる。批評家のもっとも大きい功績は、特定の対象を醜くしたり美しくしたりする特定の諸特徴を、指摘し（point out）、分離し（isolate）、注意の枠組みのうちに位置づける（place in a frame of attention）ことである。〔批評家がそのようなことをするのは、〕見るべきところ聞くべきところをすべて見たり聞いたりするのは難しいからであり、また、単純に、〈事物が色や形を実際に持つ一方で、色の調和や知覚されたリズムや形のバランスは、文字通りには客観的には存在しない〉と想定する偏見がある〔そして、それを除く必要がある〕からである。このような「非日常的（extraordinary）な質」は、「直接的な実践的関心にまったくかかわない質」である。それゆえ、相手にその質をわからせるために、批評家は「記述において不自然な（unnatural）言葉づかい」をする。「実践的な目的のために作られているふつうの（common）語彙は、事物の無関心的な知覚を妨害する」のであり、それゆえ美的質は「通常は、ふつうの語彙からの転用によって比喩的に記述される」。〔以上ハンプシャーの議論。〕

¶35　Much of what…

ハンプシャーの言うことの多くは正しいが、「ふつう」の語彙がわれわれの美的目的を「妨害」

するとか、それを比喩的につかうのが「不自然」であるとか、批評家が「自分が使う言語の主要な傾向に反する語彙を作る必要に迫られている」などと考える点でまったく間違っている。第一に、すでに見たように、広く受け入れられている美的用語はあるし、それらのいくつかは（たとえもともと比喩であったとしても）いまや比喩ではない。第二に、美的目的のために比喩がつかわれることが自然でないという見解は、美的質と美的言語の性格を根本的に見誤っている。批評において、「forceful」、「dynamic」、「tightly-knit」といった言葉を使うことについて不自然なところはなにもない。それらは、その目的にとってまさに必要な言葉である。われわれは、それらを比喩的要素を欠いた別の言葉で置き換えようとは思わないし、その必要もない。重要なのは、われわれが芸術作品を記述するためにそれらの言葉を使うとき、それらのふつうの文字通りの意味に関係した美的質を述べているという点である。美的質と非美的質のつながりは、明らか（obvious）かつ重大（vital）である。美的概念はすべて、なんらかのしかたで、非美的特徴につながれている（tethered）か、それに寄生している（parasitic）。美的用語の多くが比喩的であるという事実は、ふつうの言語が〔美的目的にとって〕使いづらい道具であるということを意味しない。しばしば比喩的である言語を使うことは、他の目的や観点からすれば奇妙に見えるかもしれないが、しかし美的な目的や観点にとってはそうではない。〔ハンプシャーのように〕美的目的のための言語使用が不自然であると言うことは、美的目的にとってなにか別の「自然な」言語使用がありうるということを含意している。しかし、まさにこれ〔しばしば比喩的な言葉づかい〕が、美的な事柄について話す自然なしかたなのである。

¶36　To help understand…

批評家はなにをするのか、そして批評家は自身の判断をどのように裏づけ、自身がわかっているものをどのように聞き手にわからせるかを理解するために、われわれが批評家としてが使う方式（method）について簡単に記述してみよう。

1. 単純に、非美的特徴に言及したりそれを指摘したりする。
2. まさにそのわかってもらいたい美的質に言及する。
3. 美的特徴と非美的特徴を結びつけて言及する。
4. 直喩とか隠喩を使う。
5. 他の事物や想像上の事例と比較・対照する。あるいはそれらを想起させる。
6. 繰り返し見せたり、繰り返し指摘したりする。
7. 話すのに加えて、声の調子や表情やジェスチャーを交える。

¶37　These ways of…

これらをすべてやったとしても、他人にわかってもらえないことはある。「この人のセンスだと無理なのかな」となる時点がある。批評家は、相手に何度も見たり読むべしと言うかもしれない。あるいは、相手の経験不足を疑って、他の事物を見たり読んだりしてから、またこれに戻ってく

るべしと言うかもしれない。とはいえ、〔最終的にわかってもらえない場合があるとしても〕これら〔上記の 1 から 7〕が批評家のやることであり、なしうることのすべてである。

¶ 38　By realizing…
美的概念がどのように使われるかを明確に理解することで、この〔美的領域という〕人間の活動領域を認識したことになるだろう。われわれは、さまざまな種類の概念をさまざまなしかたで使う。ある判断について他の人に同意してもらいたい場合になにをするのが適切かは概念の種類ごとにさまざまである。他の種類の概念に適した方式は、美的概念には適していないし、逆もまたそうだろう。

¶ 39　I have described…
ここまで、人々がいかにして美的判断を正当化し、そしていかにして他の人に美的質をわからせるかを記述してきた。最後に、ここまで概観してきた方式が、はじめから美的概念にとって自然なものであり、それに特徴的なものであることを示したい。ある人が、その絵画が繊細であることやバランスが取れていることを私にわからせようとする場合、私は、これらの用語についてすでになんらかの理解を持っているし、また、ある意味で、私が探しているものを知っている。それゆえ、われわれはどのようにして美的用語を使うことと美的質を見分けることをそもそも習得するのかという問題が生じるだろう。これは以下の二つの問いを考察することである。

(1) 人は、生まれつきどのような能力（potentiality）や傾向（tendency）を持っているのか。
(2) 訓練や教育において、われわれはこれらの能力をどのように利用しつつ伸ばすのか。

第二の問いについては、美的質に気づくわれわれの能力が、小さいころからの親や教師との接触によって陶冶（cultivate）されるということは明らかである。ここで興味深いのは、われわれは優美さや繊細さ等々がなんであるかを実例を目のまえにして教えられているわけだが、そこで使われる方式は、上述した批評家の方式と同種のものであるという点にある。

¶ 40　To pursue…
この問いを考えるために、まず「dynamic」や「melancholy」や「balanced」といった準比喩的な語について考えよう。われわれは、どのようにして、それらの語を文字通りの使用から美的使用に移行させるのか。これには、諸々の経験を結びつけ、事物に類似性を見いだし、その類似性を探ったりそれに関心を抱くような能力と傾向がなければならない。われわれが自発的にこれらのことをやり、そしてその傾向を助長させるということは、人間の知性と感受性の特徴である。容易に美的使用に移行できる用語はたくさんある。われわれは、美的用語の使用を子どもに教えることができるが、しかしまた子どもは自分自身で発見して喜んだりもする。この自然な傾向がなければ〔趣味の〕訓練はありえないだろう。しかし、この傾向を利用し、訓練によって〔趣味

の陶冶を〕手助けする段になると、われわれはまさに批評家がすることをするのである。

¶41　Of course the recognition…

もちろん、類似性の認識と単純な比喩的拡張が、言語の美的使用への移行の唯一のありかたというわけではない。たとえば、先に述べた、ガラス細工は薄ければ薄いほど繊細であるといった単純な美的判断の場合は、美的用語の導入は容易だろう。移行段階は、文字通りの使用か美的使用かあいまいな場合がしばしばある。また趣味の洗練の度合いにも差がある。しかし、いったん明らかなケースにおいてこの移行が始まったならば、美的概念の領域は拡大し、より微細なものになるだろう。

¶42　Much the same…

「dainty」や「graceful」のような非美的用法をもたない語についても、おおむね同じことが言える。これらの用語については、比喩的移行によって習得されるとは言えないものの、これらもまた非美的特徴と結びついたものであり、特定の自然な能力によって習得されるものである。目立つ（outstanding）、もの珍しい（remarkable）、ふつうでない（unusual）ような現象が、目や耳を捉え、注意と関心を引きつけ、驚き、称賛、喜び、おそれ、嫌悪感等々を引き起こす。子どもは、このようなしかたで夕日や秋の木々やバラやタンポポに反応する。われわれが、自然な関心を利用しながら最初に単純な美的用語を習得するのは、このような段階においてである。穏健な美的感受性の持ち主は、そのような〔わかりやすい〕ケースに主に美的関心を寄せ、「pretty」や「lovely」といったよくある美的用語だけを使い続ける。しかしまた、〔趣味の洗練も〕この段階からはじまる。われわれは、ここから、より広大でよりわかりづらい分野に美的関心を広げ、進むごとに、より微細で特殊な美的語彙を習得していく。その原理は〔単純な美的用語の習得のケースと〕同じである。より特殊な美的用語を習得する基礎もまた、さまざまな非美的な性質に対する関心と称賛である。そして、これらの比喩的でない美的用語にかんしても、それらが意味するものを教えたり明確にしたりするために、われわれは、比喩的な場合と同じく、批評家の方式に頼るのである。

¶43　I have wished…

この後半部分で強調したかったのは、美的用語の習得にとって不可欠な自然的な基礎である。また、どんな種類の特徴がわれわれの自然な反応を引き起こすかについても概観した（類似性や目立つもの）。比喩的でない美的用語でさえ、興味、驚き、称賛、喜び、嫌悪を引き起こす特徴と重要な結びつきを持っている。しかし、私がとくに主張したかったのは、批評家が自身の判断を裏づけ、相手に美的質をわからせるということは、問題と考えるべきではないということである。はじめから、人々がわれわれの美的感覚を伸ばし美的語彙を習得させたのも、まさにこれと同じ方式によってなのである。もしそのとき〔習得の段階〕にわれわれがその方式に応じたのなら、いま批評家の話に応じるのも驚くべきことではない。